

【論文】

権力と皇后

金子 修一

はじめに

本稿では唐以前の皇后と権力との関係を概観する。皇后や皇太后の存在は皇帝を押し退けて権力を振った時には注目されるが、皇后がおとなしく嫡妻の位置に納まっている時にはほとんど研究の対象とされない。秦の始皇帝には皇后の存在は伝えられず、皇帝在位中に皇太子も立てられなかった。漢の高祖は既に漢王の時に呂后・王太子（恵帝）を立てており、皇后・皇太子を立てる制度が漢建国時に始まったとも思われぬが、皇后・皇太子制度の起源については全く不明である。呂后が高祖崩御後に権力を振ったのは、漢の体制が固まりきらないうちはある程度果敢な政治が必要であったからである、と考えた方が良いが¹、呂后没後に劉氏の政権が回復されて文帝が立った時には、初めに皇太子（後の景帝）を立てた後にその母を皇后とした（竇皇后）。皇后ではなく皇太子を先に立てたところに、前漢初期に皇后の地位の確立していなかったことが窺われる。また、皇太子の母が皇后となることも当たり前のようにあるが実は重要であり、実際には後漢以後皇后の子が皇太子となる例は激減する。しかし、皇后と皇太子との関係はこれまで余り注意されておらず、漢代から唐代までの皇后の在り方を通覧した研究もない。

そこで本稿では正史の皇后伝（『漢書』は外戚伝、『後漢書』は皇后紀）から皇太子との関係にも留意して皇后の在り方を素描し、その上で皇后と政治との関係について考えてみたい。なお紙数の関係で、先行研究については本稿に直接関係するもののみを註記するに留め、各正史の記述については梗概のみを述べることとした。

一、漢代

前漢の場合、文帝が景帝を皇太子に立ててから母の竇氏を皇后に立てたように、初期には皇后と皇太子との関係は密接であった。景帝の王皇后は武帝が皇太子となる僅か12日前に皇后となっている。武帝の衛皇后は前128（元朔元）年に皇后に立てられ、その子は前122（元狩元）年に皇太子となった（衛太子・戾太子）。しかし前91（征和2）年、衛太子は呪詛の疑いをかけられ叛乱を起こして滅ぼされ（巫蠱の乱）、武帝は晩年に8歳の昭帝を皇太子に立てたが、幼い皇帝の後ろ盾として国家を乱すことを懸念して、母の趙婕妤は皇后には立てられなかった。昭帝の上官皇后は、武帝の遺言で霍光と共に幼い昭帝を輔佐した上官桀の孫で、子のない昭帝が20歳前後で崩ずると、甥の昌邑王劉賀が次の皇帝とされたが、即位前の不行跡が目立ち上官皇太后の詔で霍光等によって廃された。次いで衛太子の孫の宣帝が皇帝に立ち、

子の元帝を生んでいた許氏が皇后となった。しかし、許皇后は霍光夫人によって毒殺され、娘の霍皇后が立てられたが、霍光没後に宣帝が霍氏一族を滅ぼすと霍皇后は廃されて自殺した。

このように、前漢では武帝のころから有力な官僚の娘が皇后となる例がみられるようになり、以後後漢に至るまで外戚と皇帝との結びつきは顕著になってくる。前漢を倒した王莽は元帝の皇后で成帝の母の王氏（元后）の一族であった。しかし、元帝の皇太子であった成帝の皇后の趙氏（趙飛燕）は微賤の出であり、前漢一代としては皇后と有力官僚との関係は顕著ではなかった。一方で、皇太子は皇后の子である例が大半である。また、成帝の許皇后は聡慧で史書を善くし帝に上疏してもいるが、皇后の教養について言及される例は少ない。前漢では皇后と皇太子との関係が緊密であった一方、皇后の出自や教養についてはそれほど問題視されず、後漢以降に比べれば前漢の皇帝は比較的自由に皇后を選ぶ事ができた。

後漢王朝は外戚が権力を振ったことで知られるが、皇后と皇太子との関係が希薄になることにも注意する必要がある。光武帝の陰皇后は明帝の母であるが、明帝の馬皇后は子が無く、姉の女（以下、史料に従って「女」は娘の意味で使用する）賈貴人が章帝を生むとこれに代わって章帝を養育している。馬皇后は明帝が政事を相談するとその判断は的確であったが、一族の栄達は囚らず、章帝の兄弟に教授して経書を論じた。このように、後漢になると皇后の儒家的教養を評価する例が出てくる。この点は、前漢末以降官僚に儒家の教養が求められるようになり、いわゆる儒教の国教化が進んだことと対応する事実といえよう。また、馬皇后の父は名将の伏波將軍馬援であり、前漢中期以降見られた高官の娘が皇后となる例は後漢になると常態となってくる。

章帝の竇皇后も子が無く、梁貴人が和帝を生むと竇皇后は外家（外戚）の名を独占しようとして和帝を養い、梁貴人は憂死した。和帝が即位すると皇太后となり、兄の竇憲らが権威を振ったが 92（永元 4）年に誅された。後漢における外戚政治のはしりである。和帝の鄧皇后は和熹太后として知られ、105（元興元）年に和帝が崩じ、和熹太后の子ではない生後百餘日の殤帝が即位すると、皇太后として臨朝した。殤帝が崩ずると和帝の甥の安帝を立ててなお臨朝し、121（永寧 2）年に崩じた。『後漢書』安帝紀には太后の執政の記事が見え、皇后紀上の論には「鄧后は称制すること終身、号令自ら出づ」とあるので、和熹太后の場合は父や兄弟などではなく、本人自身が政治を執ったのである。『三国志』以後の皇后伝を見ても、和熹太后の執政を讃える文言が散見する。和熹太后の臨朝は、親族の栄達を図る恣意的な政治でなかった。安帝の閻皇后は、宮人李氏が皇太子保を生むと李氏を毒殺した。和熹太后が崩ずると閻皇后の兄閻騫らが朝権に与り、後は皇太子を廃して済陰王とした。125（建光 4）年に安帝が崩ずると、後は済陰王の立つのを恐れて皇太后として臨朝し、閻騫らと安帝のまたいとこの北郷侯劉懿（若年だが年齢不詳）を皇帝に立てた。しかし北郷侯は二百餘日で薨じ、宦官の孫程らが済陰王（順帝）を立てて

閹騫らを誅殺、太后は離宮に移されて翌年に崩じた。後漢における外戚と宦官との政争はこの頃から顕著になってくる。

順帝の梁皇后にもやはり子はなく、144（建康元）年に順帝が崩ずると美人（女官の名）虞氏の子で2歳の冲帝を立て、梁后が臨朝した。冲帝が翌年に崩ずると章帝の玄孫で8歳の質帝を立て、梁太后がなお臨朝した。善政に努めたが、兄の梁冀が質帝を毒殺して和帝の孫で15歳の桓帝を立て、梁氏一族が政権を独占した。太后も宦官に溺れるなど、天下を失望させたという。梁氏一族が誅滅されると桓帝が親政し、都合3人の皇后を立てたが子の無いままに崩じ、最後の竇皇后が臨朝して12歳の靈帝を立てた。しかし、竇太后は父の竇武が宦官と争って殺された後は政治に関わらなかった。靈帝の何皇后は皇子辯（弘農王）を生んだ後に皇后となった。何皇后の家は屠殺業者であった。弘農王は靈帝の崩後に皇帝となり、何皇后（当時は皇太后）は光武帝の陰皇后以来の皇帝の母である皇后となったが、弘農王と共に董卓に殺された。弘農王の後に立った後漢最後の皇帝献帝の最初の伏皇后は曹操に殺され、その後に曹操の中女の曹皇后が立てられた。献帝の母の王美人は何皇后に殺されている。

このように、後漢になると初代の光武帝の陰皇后を除き、皇后が皇太子を生んだ例はほとんどない。保科季子は、漢初から武帝期前半まで、皇太子妃は皇太子の皇帝即位と同時に皇后に昇格し、おおげさな立后儀礼を必要としなかったのが、後宮制度の整備される武帝期の後半におそらく皇后の地位も変化し、前漢後半には立后儀礼を必要とする皇后独自の権威が生まれた。皇帝と皇后との間に『儀礼』の「夫妻一体」の思想が適用され、皇后は『礼記』に描かれる「天子の后」に比される地位を獲得した。前漢末になると、皇太后の称号は先帝皇后によって独占され、皇帝の生母に対する先帝皇后権威の優越が決定づけられた。後漢になると皇后の地位が確立する一方、和帝頃から「母は子を以て貴し」を理由に皇帝の生母に皇后を追尊する例が頻発し、正規の皇后の権威は相対化されて嫡妻としての皇后の地位は低下していった、と指摘している²。これに以上の結果を加味すると、漢代では前漢中期以降に宮中で皇后の地位が明確になる一方、皇后と皇太子との関係は希薄になっていった、と概括できよう。ただし、後漢では皇太子が皇帝となる例も五代目の殤帝以後はほとんど無くなるので、皇后と皇太子との関係については三国時代以降の事例も見て行かなければならない。外戚政治は和帝の時から萌してくるが、和熹太后の治政は後世の史書にも模範的に語られ、後に評判を落とした順帝梁皇后についても、『後漢書』質帝紀には太后は朝から夜まで政治に努めたとある。後漢の外戚政治という乱脈のイメージが強いが、皇太后の親政があった事実も評価されなければならない。

二、魏晉南朝

三国時代については魏のみに触れておく。魏では文帝・明帝にそれぞれ二人の皇后が立てられた。文

帝の甄皇后は明帝の母であるが、魏の建国翌年の221（黄初2）年に文帝から死を命ぜられ、崩御してから皇后の璽綬を賜わったもので、皇后として明帝を生んだわけではない。明帝には子が無く、明帝崩御の日に皇太子に立てられた斉王芳の出自は不明で、斉王及び東貴郷公髦・陳留王奐（元帝）の三少帝はすべて皇后の子ではなかった。三少帝は司馬氏によって次々に廃位または殺されたが、斉王は明帝の郭皇后（当時は太后）の令で廃位され、別の令で東貴郷公が立てられている。東貴郷公が司馬氏の専権に耐え切れずに刃を抜いて殺されると、太后の令を詔として陳留王を立てている。しかし、郭太后の令や詔は司馬氏の意向を映したものであって本人の意思の発露ではない。明帝が王であった時に河内の虞氏を妃としたが、虞氏は皇后になれずに曹操の後の太皇太后が慰めると、虞氏は「曹氏は好んで賤を立て、義を以て挙げられた者はいない。（魏のやり方は）亡国喪祀につながる」と述べた（明悼毛皇后伝）。このように、魏の皇后の地位は身分的にも政治的にも高いものではなかった。

西晋では、恵帝の母である武帝の楊皇后（武元楊皇后）は、武帝が胡夫人を寵幸して太子（恵帝）の地位の不安定になるのを慮り、従妹の楊皇后（武悼楊皇后）を推薦して崩じた。この武悼楊皇后の父楊駿と恵帝の賈皇后とが対立し、賈后が楊駿や楊皇后を誅殺したことが八王の乱の発端となる。皇后伝では武悼楊皇后は善良な女性として描かれているが、賈后は性酷虐、太子妃の時に妾が子を孕んだのを見て戟を擲って墮胎させ、怒った武帝が廃そうとしたが周囲のとりなしで免れた。恵帝が即位して皇后となると乱暴はさらに募ったが、恵帝は武帝が廃太子を考えたほど暗愚であり、賈後の専断は恵帝の資質に原因があったように思われる。賈后には男子がなく、妹の夫の子を養育して立てようとし、謝夫人の生んだ愍懐太子を廃して殺害したが、趙王倫によって自身が殺された。次の懷帝は武帝の第二子、懷帝が匈奴の劉淵に拉致された後に皇帝となった愍帝は、武帝の孫で呉王安の子である。建康で晋を継承した東晋の元帝は琅邪王鯁の子であり、やはり皇后の子ではない。東晋では元帝も含めて11代の皇帝が立つが、皇后の子はおらず、それぞれの母親は子が皇帝となってから皇太后の称号を得ている。

『晋書』各本紀の冒頭には皇帝の母親に関する記述が無い。恵帝の賈皇后の動きも恣意的で恵帝を補佐するようなものではなく、武悼楊皇后の父の楊駿との対立も、外戚同士というよりは賈皇后の個人的な対立のように『晋書』には記されている。晋においても、宮中や朝廷での皇后の地位は軽かったように思われる。

宋以後の南朝の皇后の存在も決して大きいものではない。宋初代の武帝の臧皇后は東晋の408（義熙4）年になくなり、少帝を生んだ張夫人は諱・本貫共に不明である。宋建国の420（永初元）年に夫人を押し、少帝が即位すると皇太后となったが、少帝が廃されると共に退いた。少帝の司馬皇后は晋最後の皇帝恭帝の女で、少帝が即位すると皇后となったが、少帝が424（元嘉元）年に廃されると宮陽王妃となった。少帝は武帝の長子で、次の文帝は第三子である。文帝の袁皇后は皇太子の劭を生んだが、440（元

嘉 17) 年に崩じた。その後、北魏討伐を主張する文帝とこれに反対する皇太子とが対立し、453 (元嘉 30) 年には皇太子が文帝を殺害するに至る。皇太子劼の元凶伝 (『宋書』巻 99) の序文には

前代自り以来、未だ人君即位の後に皇后の太子を生むこと有らず。唯だ殷の帝乙のみ既に踐阼して正妃は紂を生む。是に至りて又た劼有り。

とあり、皇后の立場で皇太子を生むのは異例の凶事であるとしている。『宋書』は南朝梁の沈約の著書であり、南朝では皇后と皇太子との関係がほとんど顧慮されていなかったことを、この一文は端的に示している。

劼を倒したのは文帝の第三子の孝武帝である。母の路淑媛は、元嘉 30 年に孝武帝が即位すると皇太后となった。太后は頗る政事に預かり、弟の子の路休之・路茂之等は顯職を得た。廢帝が即位すると太皇太后となり、廢帝の後には文帝の第十一子の明帝が立ったが、太后に育てられた明帝は幼主を廢した時に路休之・路茂之の官職を上げた。明帝が孝武帝の諸子を殺すと路休之等も陥れられたが、その諸子は免れた。このような経緯から見ると、路皇太后が政事に預かったといっても、皇帝の政治を左右するものであったとは思われない。明帝の王皇后は後廢帝が即位すると皇太后となって助言したが、次第にそれを悦ばなくなった後廢帝は毒殺を試みた。順帝が即位すると南齊の高帝が順帝の禪讓を図ったが、太后はこれに関わったという。後廢帝は明帝の長子、宋朝最後の順帝は明帝の第三子であるが、明帝の江皇后、順帝の謝皇后は共に父の官職が伝えられていない。宋の諸皇帝の皇后は特に高い地位の官僚の子女ではなかった。

元凶伝の序に見えるように、この時代に皇后と皇太子との関係がほとんど無かったことは明言できよう。文帝の路淑媛は明帝朝で、明帝の王皇后は廢帝朝及び順帝朝である程度権力を振ったようにも見えるが、朝廷での政治を左右するようなものではなかった。総じて、宋の皇后の地位もさして高くはなかった。

南齊初代の高帝の劉皇后は、宋の後廢帝の 472 (泰豫元) 年に亡くなった。武帝の裴皇后は、南齊建国の 479 (建元元) 年に皇太子妃となったが 3 年に薨じ、武帝が即位すると皇后を追尊された。文惠太子妃の王皇后は武帝の 493 (永明 11) 年に皇太孫太妃となり、鬱林王が即位すると皇太后となった。鬱林王の何皇后は性淫乱で、鬱林王が廢されると王妃に貶された。次の海陵王の王皇后は 494 (延興元) 年に皇后となったが、その年に海陵王が廢されると王妃となった。明帝の劉皇后は武帝の 489 (永明 7) 年に卒し、明帝が即位すると皇后を追尊された。東昏侯の褚皇后は侯の即位で皇太子妃から皇后となったが、東昏侯は潘妃を寵し後は廢して庶人とされた。南齊最後の和帝の王皇后は 501 (中興元) 年に皇后となったが、同年に和帝が梁に禪位すると降って妃となった。

南齊の皇后は宋の皇后に比べると、父祖の官僚としての地位は概して高いが、皇太子の母親はいない。

南齊自体が短命で各皇帝の在位も短く、鬱林王・海陵王・東昏侯と、若年で廃位された皇帝も多いので、政治的に存在感を示した皇后はいなかったと総括できよう。

梁の武帝の郗皇后は南齊末の 499（永元元）年に亡くなり、武帝が梁を建国して皇帝となると追崇して皇后とされた。武帝は在位中には皇后を立てなかった。昭明太子の母丁貴嬪は性仁恕で華飾を好まず、武帝の仏教信仰が厚くなるとやはり厚く仏教を信仰したが、526（普通 7）年に薨じた。武帝の末年に侯景の乱が起こり、皇太子であった簡文帝が侯景によって皇帝に立てられた。簡文帝の王皇后は、南齊の和帝の王皇后と同じく太尉王儉の孫女であるが、武帝の 549（太清 3）年に皇太子妃として薨じ、簡文帝の即位によって追崇して皇后とされた。簡文帝が侯景に殺されると、長江中流の江陵で元帝が立った。『梁書』皇后伝では元帝には徐妃のみ記載があるが、武帝の太清 3 年に譴責されて死去した。

梁はほとんど武帝一代の王朝であり、皇帝在位中に置かれた皇后は、陳霸先（陳の武帝）の擁立した最後の敬帝の王皇后だけである。梁の皇后の存在も大きなものではなかった。

陳の武帝の章皇后の本姓は鈕、章氏に養われて改姓した。武帝が崩ざると皇后は文帝を即位させた。次いで、文帝の後に立った廢帝を廢して文帝の弟の宣帝を即位させ、二度の帝位継承に関わった。『詩経』『楚辞』を誦したというから教養もあったが、后自身の子については伝えられていない。文帝の沈皇后は廢帝の母であり、後の宣帝が政務を取り仕切ったので、その打倒を計画したが未遂に終わった。廢帝の王皇后の子の至澤は 567（光大元）年に皇太子となったが、帝が廢されると臨海王となった。宣帝の柳皇后は後主の母、父の柳偃は梁の武帝の女長城公主の婿で柳皇后は名門の出である。宣帝崩御後に始興王叔陵が起こした反乱を切り抜けた。当時、隋も長江に迫っていたが後主は病み、始興王の誅殺、宣帝の喪事、辺境の防守などの衆務は、後主の命令の形をとってもすべて柳太后に決した。後主の沈皇后の母は武帝の女の会稽公主であり、后は性端靜、聡敏強記で經書・史書を涉獵し、書翰に工であったというから教養人である。しかし后には子が無く、後主の寵愛は蕭織の父兄を持つ張貴妃が独占し、後宮は乱脈で后は不遇であった。

以上のように、陳の皇后には文帝の沈皇后、廢帝の王皇后、後主の柳皇后と皇帝の母も多く、王皇后・柳皇后は皇太子の母でもある。父祖の官も比較的高く、皇帝の交代期に重要な働きをした皇后も多く、また皇后の教養に関する記述も比較的目的立った。南朝の中では、陳にはオーソドックスな意味での皇后が多かった。しかし、陳の各皇帝の在位は短く、王朝権力も南朝の中では最も微弱であったので、皇后・皇太后の權威といっても目覚ましいものであったとは言えない。

三、北朝

北魏の特徴として、後宮の女性に金人を鑄らせて成功した者を皇后とすること、また「魏の故事」（『魏

書』巻13・道武宣穆皇后伝)として、皇太子の生母に自殺を命じることがある。皇太子が乳母に育てられることもあり、『魏書』皇后列伝には乳母・保母で伝の立てられた者もいる。

北魏が東晉・南朝に対抗して皇帝を名乗るのは、道武帝(皇帝としての在位は398~409)の時である。皇后の慕容氏は後燕の恵愍帝慕容宝の女だが、明元帝を生んだ劉氏は「旧法」によって道武帝の末年に薨じ、明元帝が即位すると皇后を追尊された。同様に、太武帝を生んだ明元帝の皇后の杜氏も、太武帝が即位すると皇后を追尊された。また、明元帝の皇后姚氏は後秦の文桓帝姚興の女、金人を鑄て成らず皇后にはなれなかったが、薨去後に明元帝から皇后の璽綬を贈られている。太武帝の皇后赫連氏は赫連かくれん屈丐くつがいの女。皇太子で薨去し死後に皇帝号を贈られた景穆帝を生んだ賀氏は、死後に皇后を贈られている。このように、北魏初期の皇后には五胡諸国の皇帝や王の女が多い。

景穆帝の皇后郁久いくきゅうりよ閼氏は文成帝を生んで太武帝の末年に薨じ、文成帝の即位によって皇后を贈られた。文成帝の皇后馮氏は孝文帝の祖母で、文明太后として知られている。川本芳昭は孝文帝の実の母であると推定しており³、そうであれば皇太子を生んでも自殺させられなかった北魏最初の皇后となる。次の献文帝を生んだ文成帝の李皇后は死後に皇后を贈られた。献文帝の皇后李氏は『魏書』皇后列伝では孝文帝の母とされ、やはり死後に皇后を贈られている。景穆帝以後の皇后は北魏の宗室や官僚の家柄の出身である。ただし孝文帝の皇后林氏は、父の平涼太守林勝が誅殺されて掖庭に入ったもので、必ずしも身分は高くない。実子の恂が皇太子になる時に、文明太后の意思で自殺させられた。しかし、恂は後に死罪となり、林皇后は廃して庶人とされた。このほか、孝文帝の廢皇后・幽皇后姉妹及び高皇后は、いずれも高官の女である。宣武帝を生んだ高氏は急死し、宣武帝を養育しようとした幽皇后に殺されたと噂された。

宣武帝の于皇后は皇后となった後に急死し、高夫人の仕業と噂された。その高夫人は孝文帝の高皇后の妹、孝明帝が即位すると皇太后となった。後に、天文の異変の禍を避けるために靈太后によって殺された。孝明帝の胡皇后は靈太后の従兄胡盛の女である。孝明帝を生んだ宣武帝の靈皇后(靈太后)は司徒胡国珍の女、北魏で皇太子を生んで殺されることを免れた最初の正規の皇后である。北魏では、景穆帝・文成帝以後は魏の宗室や北族系の高官の女が皇后となる例が多くなった。

北魏の皇后のうち、権力との関わりで特筆すべきは文成帝の文明皇后と宣武帝の靈皇后とである。文明皇后は献文帝が即位すると皇太后となり、丞相乙渾いつこんが謀逆すると、服喪中の13歳の献文帝に代わって乙渾を誅し、臨朝稱制した。献文帝は471(皇興5)年に孝文帝に譲位し、476(承明元)年に崩御するが、孝文帝を養育したのは文明太后であり、太后が献文帝の暴崩に関与したといわれた。太后は490(太和14)年に49歳で崩ずるまで臨朝専制し、孝文帝は政務に関わらないことが多かった。靈皇后は宣武帝在位中は充華嬪という地位にあり、孝明帝が即位すると皇太妃から皇太后となり、幼い孝明帝に代わ

って臨朝し、皇帝並みに命令を詔、自称を朕とし、群臣の上書には陛下と記させた。性聡悟で才藝多く、万機を親覧し手ずから筆を揮って断決した。後に宗室の領軍將軍元叉が靈太后を抑えて専権を振ったが、失脚し除名されて民となると靈太后は再び臨朝した。しかし政治は弛緩し、孝明帝と靈太后との関係は悪化、528（武泰元）年の孝明帝の崩御は靈太后の側近の仕業とされた。同年に爾朱榮が蜂起し、靈太后と太后の立てた幼主とを洛陽北の黄河河畔の河陰で殺した。これによって北魏は東魏・西魏に分裂するが、東魏・西魏の皇后は省略する。

このように、北魏では文明太后と靈太后とが太后として幼帝を補佐し、積極的に政治に関与した。文明太后の場合には孝文帝への権力移譲は円滑であったが、靈太后の場合は途中で元叉の執権があり、その後の政治は混乱した。それにしても、皇后が政治権力から隔絶していた南朝とは大きな違いを認めることができる。しかし、漢代と比べると外戚という集団での専権とはならず、皇后（皇太后）個人の力量に依るという性格が強い。また、靈太后は皇太子の母であり、文明太后にもその可能性は想定されているが、それ以前の北魏の慣習では皇后が皇太子の母となる条件は無かった。文明太后・靈太后両者の権力への関与については、皇太子との関わりを考慮すべきであるかもしれない。

北齊の場合、高歡（神武帝を贈られる）の妃の婁氏が高澄（文襄帝）、初代皇帝の文宣帝、三代目の孝昭帝、四代目の武成帝を生んでいる。残るは二代目の廢帝、五代目の後主、最後の幼帝であり、北齊の皇帝は実質的にほとんど高歡の妃の婁氏（神武明皇后）の子であった。婁氏は高澄が嗣位すると太妃、文宣帝の建国の後に皇太后となり、文宣帝の子の済南王（廢帝）が即位すると太皇太后となった。文宣帝の遺詔を受けて廢帝を補佐した尚書令楊愔等が諸王を疎外したので、太皇太后は密かに孝昭帝等と謀って楊愔を誅し、令を下して実子の孝昭帝を立て、再び皇太后となった。孝昭帝が崩ざると、太后はまた詔を下して武成帝を立て、翌年の562（太寧2）年に崩じた。済南王を廢して以降の動きを見ると、婁氏はかなり実質的な政治的権力を有していたのではなかろうか。廢帝の母は李皇后、後主の母は武成皇后胡氏、幼主の母は後主皇后穆氏であるが、『北齊書』の皇后伝を見る限りでは北齊の後宮は乱脈を極め、皇后に権威があったとは思われない。神武明皇后の存在が大き過ぎたのかもしれない。なお、高歡には茹茹（柔然・蠕蠕）の茹茹公主も嫁している。

北周の建国は孝閔帝の557（年号なしの元年）年であり、君主号を天王とした。しかし政治の実権を握っていた従父兄弟の宇文護は同年中に孝閔帝を弑し、帝の兄の明帝を即位させた。明帝は559年に天王を改めて皇帝を称し、武成という年号も立てたが、翌年に宇文護に殺された。宇文護は明帝・孝閔帝の弟武帝を立てたが、武帝は572（天和7）年に宇文護を誅して実権を握った。武帝が578（宣政元）年に崩ざると子の宣帝が立ったが、宣帝は翌年に皇太子の静帝に位を譲った。宣帝自身は天元皇帝と称し、自分の皇后を初めは4人、後に5人置いた。翌年に宣帝は22歳で崩じたが、その翌年の581（大定元）

年には、静帝の禅譲を受けて隋の文帝が建国している。

このように概観すると、北周で在位中に皇帝に相応しい働きをしたのは、ほとんど武帝のみであり、北周の皇后で政治的に注目すべき働きをした者も見当たらない。そこで出自を中心にみると、孝閔帝の元皇后は西魏の文帝の女、明帝の独孤皇后は太保衛國公独孤信の長女で、いずれも北族の名門の出身と言える。独孤信の四女は唐の高祖の母（元貞后）、七女は隋の文帝の皇后で、独孤信の家は当時随一の閹閥を誇った。武帝の阿史那皇后は突厥の木汗可汗俟斤の女、宣帝の楊皇后は隋の文帝と独孤皇后との長女である。しかし、彼女達はいずれも皇太子の親ではない。静帝の司馬皇后は柱国・滎陽公司馬消難の女であるが、後に父が北周に叛して陳に奔ったために庶人に落とされた。孝閔帝の母の宇文泰（文帝）元皇后は北魏末の孝武帝の妹であるが、武帝の母の文帝叱奴皇后の出自は不明。明帝の母は姚夫人。宣帝の母武帝李皇后は南朝梁の江陵が北周に占領されて長安に移った家の出身、静帝の母の宣帝朱皇后は罪によって東宮に没入された家の出身。このように、北周では正規の皇后と皇太子との関係も希薄であった。

隋の文帝の独孤皇后は上述の独孤信の女、長女は北周明帝の皇后である。14歳で文帝に嫁ぐと、自分以外の子を作らないことを文帝に約束させた。後に、文帝が寵愛した女性を独孤皇后が殺し、怒った文帝が単騎で山谷の間に入り、後を追った高官の高顛・楊素が諫めると、文帝が太息して「吾は貴きこと天子為るも自由を得ず」と言った、というエピソードは有名である。宦官に文帝の政の過失の有無を伺わせ、諫めて益する所は多かった。文帝と政事に言及すると往々にして意は合ひ、宮中では二聖と称した。一方、長男で皇太子の楊勇を廃し、二男の楊広（煬帝）を皇太子とするように画策し、これに反対した高顛を文帝から遠ざけた。独孤皇后の政治に対する意欲には適否両面があったと言えよう。煬帝の蕭皇后は後梁の孝明帝蕭巋の女で、煬帝が晉王の時に文帝が後梁から妃を選ぶことにして王妃となった。煬帝を弑した宇文文化及が竇建徳に敗没すると、竇建徳からさらに突厥処羅可汗の許に至り、唐の630（貞観4）年に太宗が突厥を滅して漸く長安に戻る、という数奇な運命をたどった。

四、 唐代

唐代では、後半に宦官が皇帝を殺害するほどの権力を振り、敬宗（在位824～826）が宦官に殺されて文宗が即位して以後は、皇帝の死の直前に至るまで皇太子等は立てられなくなった。皇后についても、肅宗（在位756～762）の張皇后が、肅宗の死後に皇太子の代宗（在位762～779）に代えて越王係を立てようと謀って殺されてから、皇帝の在位中に皇后が立てられることはなくなった。唐末の昭宗（在位888～904）は長安から都落ちしていた時期に皇后を立てたが、実質的には唐後半に皇后が立てられた例は無いと言い得る。

高祖の竇皇后の母は北周武帝の姉の襄陽長公主であるが、后は隋の大業中（605～617）に崩じた。太宗の長孫皇后は隋の右驍衛將軍長孫晟の女、廢太子承乾と彼と反目して承乾廢位の一因となった魏王泰、及び高宗の母である。太宗は常に后と賞罰の事を論じ、后は牝雞之晨（雌鶏が時を告げる、女性が関わると政治が乱れる）の喩えを引いて答えなかったが、太宗に数多くの助言をした。636（貞觀 10）年に 36 歳で崩じ、太宗はその後皇后を立てなかった。長孫皇后には古の婦人の善事を集めた『女則』10 卷があり、中で後漢明帝の馬皇后が外戚の進出を抑えられなかったことを批判している。中国を統一した唐朝にとって鑑となるのは漢代であり、長孫皇后にとっても鑑としたのは後漢明帝の馬皇后であったと思われる。則天武後の策略で廢された高宗の王皇后は皇太子妃から皇后となったが、注目すべき事績は伝えられていない。武后及び中宗の韋后については後述する。

中宗・睿宗は共に則天武後の実子であるが、便宜上睿宗について先に述べる。睿宗の劉皇后は、684（文明元）年に則天武后が中宗を廢して睿宗を立てると皇后となったが、693（長壽 2）年に武后に殺された。玄宗を生んだ竇德妃も劉皇后と同時に殺され、睿宗は 710（唐隆元）年に即位すると竇德妃を昭成皇后と諡した。死後ではあるが、睿宗の皇后は肅明劉皇后と昭成竇皇后との二人が並ぶこととなった。玄宗の王皇后の父の王仁皎は、睿宗のきょうだいの太平公主と玄宗とが睿宗を挟んで対立した時に、玄宗側に立った人物である。しかし、後の兄の王守一が后に子の無いことを恐れてまじないをしたのが呪詛とされ、724（開元 12）年に后は庶人に落とされて卒した。肅宗の母の楊氏は開元 17 年に薨じ、756（至徳元載）年に肅宗が即位すると、太上皇となった玄宗によって翌年に皇太后に追冊された。肅宗の張皇后の祖母は玄宗の母の昭成皇后の妹である。安史の乱の最中に張皇后は肅宗をよく支えたが、宦官の李輔国と禁中で権を振って政事に関与し、肅宗は如何ともしがたかった。しかし、前述のように肅宗崩御後に幽閉されて崩じた。代宗の母の呉氏は父の罪によって後宮に入り、740（開元 28）年に薨じ、代宗が 762（宝応元）年に即位すると章敬皇后と諡した。唐で皇帝の在位中に正式に皇后となった者、及び皇后以外で皇太子を生んだ者の概略は以上である。皇太子を生んだ正規の皇后は、長孫皇后と則天武后とに止まっている。

則天武后については既に多くの著書があるので⁴、本稿では具体的な事蹟は省略し、これまで述べてきた各王朝の皇后のあり方と比較してみたい。674（上元元）年には高宗は天皇、武后は天后を称したが、翌年に高宗は風疹を病んで武后の垂簾聽政が始まり、内外は二聖と称した。二聖には隋・文帝の独孤皇后の先例があり、武后が独孤皇后を手本とした可能性はあるかもしれない。しかし、武后が政治の第一人者として臨朝するのは中宗即位時の 684（嗣聖元）年、周王朝を開くのは 690（天授元）年で、垂簾聽政してから十数年後であり、敬暉らによって幽閉、退位させられる 705（神龍元）年正月まで、皇帝としてさらに十数年間君臨した。後漢の和熹太后でも臨朝の期間は足掛け 17 年であり、政権を握ってから

の武後の息の長さは他の皇后の追隨を許さない。また、武氏一族が権力を振い出したのは武周成立以後で、垂簾聽政以後の高宗朝で外戚を重用したことはない。しかも、実子ではあるが唐室の中宗を皇太子とした698（聖暦元）年以降は武氏一族の期待を抑え込んだ。やはり、政治家個人としての武後の手腕を認めるべきである。垂簾聽政の時期だけではなく、周王朝を開いてからも武后が祭祀儀礼を積極的に活用していたことも注目される⁵。

韋皇后は中宗の即位時に皇后となり、中宗が廢位されて房州に流されてからは自殺しようとする中宗を励ました。しかし、中宗復位後に敬暉らが武氏を誅殺しようとする謀と、武後の姪の武三思が後に近づき、逆に敬暉ら五王を追い落とす。后は実子ではない皇太子重俊（節愍太子）を憎み、節愍太子は707（神龍3）年に武三思らを斬り、反乱を起こして誅殺された。翌景龍2年（708）には、韋後の衣裳箱から五色の雲が起ったとの報告があり、中宗はこれを絵に描かせて天下に大赦した。この頃から、政治の主導権は中宗ではなく韋后にあったと判断できる。景龍3年の冬至には中宗は天を祀る南郊の郊祀を行うが、この時には中宗が天神に最初に酒を献げる初献を行った後、続いて酒を献げる亜献を韋后が行った。南郊祀は本来男性の行うべき祭祀であり、皇后の亜献は前例がないが、この時には儒者の祝欽明が強引に皇后亜献の論理を作り上げた。翌710（景龍4）年には韋后は夫の中宗を毒殺し、自分が臨朝して女の安樂公主を皇太女としようとした。これに対して睿宗の子で臨淄王の玄宗がクーデタを起こして韋后・安樂公主を誅殺し、唐朝の政権はようやく一応の安定を見た。

後世では、以上の武后・韋后台頭の時期を、女性が政治を乱した時期として一口に「女禍」と評価する。しかし、武後の執政期の内政では特に失政は伝えられていない。また、韋后が中宗を毒殺したことについては、次のように考えることもできると思う。玄宗が韋后を倒した後は睿宗が即位し、三男の玄宗が皇太子となる。しかし、その後睿宗のきょうだいで武氏一族の武攸暨ぶきおうに嫁していた太平公主と玄宗とが対立し、712（先天元）年に太平公主の勧めで睿宗は玄宗に讓位して玄宗が皇帝となったが、睿宗は新しく太上皇帝の地位を創設して人事・外交等の決定権は自身が握った。朝廷の宰相も多くは太平公主一派であった。翌年に玄宗が太平公主一派の宰相を排除して公主を自殺させると、睿宗は大権を返上して隠棲し716（開元4）年に崩じた。すると、玄宗は翌年に洛陽に行幸して武周政権の正殿であった明堂を改築して唐朝時代の乾元殿けんげんでんに戻し、これ以後武后政治の記憶を払拭するように努める⁶。してみると、玄宗自身は武後の政治を否定的に捉えていたが、睿宗存命中にその事を表に出すには憚りがあったのであり、睿宗の存在はそれくらい大きかったと言える。

一方、皇帝に返り咲いてからの中宗には皇帝としての力量を示す行動は見られない。中宗と韋皇后との間には長男の懿徳太子重潤がいたが、701（大足元）年に則天武后に杖殺されていた。次の節愍太子は韋後の所生ではなく、その点で韋后には焦りがあったのではなからうか。自分の夫の中宗とその弟の睿

宗と比べて、睿宗の方に人物としての器量があれば、いずれ睿宗に政治の実権が移る。そのことを懸念した韋后が自分で政権を握り、睿宗に政権が渡らないように図ったとすれば、娘の安楽公主を前代未聞の皇太女という地位に据えようとしたことも説明はつく。中宗復位後の韋后の行動について、直前の武後の真似をしようとした貪欲な権力欲の表れ、と単純に解してはいけないのではなかろうか。この点の当否については今後の課題としておきたい。

おわりに

故谷口やすよ氏が、皇后権の問題を提起して以来、皇后の在り方について議論が続けられてきた⁷。しかし、初めに谷口氏が漢代について論じたせいか、今日まで漢魏時代の皇后・皇太后の在り方は議論されたが、それ以後は則天武后などの際立った存在を除いて、皇后についてほとんど議論されることはなかった。そこで本稿では、以上のように前漢から唐までの皇后について皇太子との関係に留意しながら概観してみた。王朝ごと、皇帝ごとに皇后の在り方はさまざまであるが、敢えて纏めてみると以下の如くなる。

前漢初期には皇太子の母親が皇后となり、制度的に皇后の存在が確立していたわけではなかった。前漢中期以降、高官の女が皇后となる場合も多くなり、皇后の制度も明確になってくる。一方で、後漢に入ると皇后が皇太子を生んだ例はほとんどなくなり、制度的に確立した皇后と皇太子との関係は逆に希薄になる。この関係は魏晉から南朝へと続き、皇后の立場で皇太子を生むのは異例である、との評価すら南朝には存在した。南朝の皇后の権能ははなはだ軽かったと言える。北魏では文明太后・靈太后と、二人の皇太后が政治の主導権を握った。後漢で和熹太后が政治を主導したことは、後世の議論でも肯定的に評価されている。しかし、後漢では外戚政治も目立ったが、文明太后・靈太后の場合は一族の外戚政治には至っていない。隋では文帝の独孤皇后の存在が大きく、唐では太宗の長孫皇后が賢婦人として高く評価されている。則天武後の登場は、外戚政治の形を取らなかったことも含めて、北朝の皇后の在り方と結び付けて考える事ができよう。また、韋皇后は復位後の中宗を毒殺して則天武後の亜流のように言われることが多いが、中宗の弟の睿宗の存在を考えると別の解釈も可能である。

以上のように概括すると、権力を振った皇后・皇太后について、結局は個々の資質や皇帝との関係に起因するという、超歴史的な結論しか出てこないようにも思われる。しかし、魏晉南朝では皇后と皇太子との関係が希薄であるのに対し、北朝から唐では皇后の子が皇帝となる場合も多く、皇后・皇太后が政治に近づく機会の多かったことは明らかとなった。今後は以上の点を踏まえて、皇后の在り方についてよりきめの細かい議論が展開されることを期待したい。

- 1 角谷常子「呂后——“悪女”にされた前漢初代の皇后」、小浜正子編『アジア遊学 191 ジェンダーの中国史』、勉誠出版、2015年、参照。
- 2 保科季子「天子の好述——漢代の儒教的皇后論——」、『東洋史研究』第61巻第2号、2002年。
- 3 川本芳昭「孝文帝のパーソナリティと改革」、同『魏晋南北朝時代の民族問題』所収、汲古書院、1998年、初出は1981年。
- 4 則天武后に関する論著は数多いが、比較的新しい概説書として氣賀澤保規『則天武后』白帝社、1995年、講談社学術文庫、2016年を挙げておく。関連する参考文献については同書を参照されたい。なお、原百代『武则天』（たまいらば、全2冊、1980年（1978年の再刊）、毎日新聞社、全3冊、1998年）は、小説であるが則天武后をめぐる人間関係を詳述しており、参照に値する。
- 5 拙稿「則天武后の明堂の政治的役割」、拙著『古代中国と皇帝祭祀』所収、汲古書院、2001年、初出は1986年、及び「略論則天武后在政治上对祭祀礼儀の利用」、趙文潤・李玉明主編『武则天研究論文集』所収、山西古籍出版社、1998年、参照。
- 6 拙稿「玄宗の祭祀と則天武后」、古瀬奈津子編『東アジアの礼・儀式と支配構造』所収。吉川弘文館、2016年。
- 7 谷口やすよ「漢代の皇后権」『史学雑誌』第87巻第11号、1978年、及び「漢代の『太后臨朝』」『歴史評論』第359号、1980年。岡安勇「漢魏時代の皇太后」『法政史学』第35号、1983年。下倉渉「漢代の母と子」『東北大学東洋史論集』第8号、2001年。塚本剛「漢代における皇太后の再検討」『史叢』第69号、2003年、同「前漢における皇后（皇帝嫡妻）の政治介入」『日本大学文理学部人文科学研究紀要』第74号、2007年。